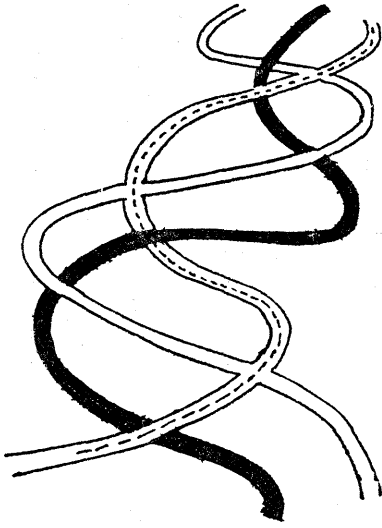


歌の中から

長谷川 冴子



ことしは十五人の中学一、二年生が修了式を終え、いちおう現役を退いた。毎年のことながら、笑顔で始まり、涙、涙で幕を閉じる修了式には、指導者の私自身ついもらい泣きしてしまう。小学一、二年で入隊し、練習、合宿、演奏会・海外演奏旅行と、最も成長のはげしい時期に、ふつうでは考えられないような経験をし、苦しみと喜びを分かち合うのだから、多感な子供たちにとって、別れの涙はごく自然の発露だろう。

修了式恒例の修了生たち自身の構成による小さなコンサートは、半ばあたりから声をつまらせる子供が続出して、歌にならなくなってしまう。とくにことしは、合唱隊の父ともいべきポーロ・アヌイ神父様が亡くなってから半年ということで、神父様の好きだった讚美歌『主よ私の声を聞き給

え』が歌われたが、涙は現役の小さな子供たちや父母にまで伝染して、いつもの年にもまして心に残る修了式となった。

こうして単立っていく子供たちも、最初はただ小さく、可愛いだけ。隊員としてはまったく使いものにならない、という言い分はかわいそうだけれど、まあ、そういった状態で入隊してくる。なかには歌はあまり好きじゃないという子さえいる。音程がとれない。ピアノで示される音はわかっても、それと同じ音を声で出せない。最近の幼児音楽教室では、音名と音は熱心に教えるので、耳から理解力はおしなべてよいけれど、体を通して音を表現することができない。低音はわりあい音にしやすいが、高音になるとまったくだめ。これは、子供たちの好きなテレビ漫画やポップスなど、世の中に流れている音が、ぜんたいに狭い音域になっているせいもある。というわけで、訓練は音をとらせることから始める。ピアノをたたいては声を出させる。低い音から高い音へ、音程のとれる範囲を広げていく。スポーツ選手が

足腰の鍛練に階段を駆け上ったり駆け降りたりするように、音の階段を緩急さまざまに上下させる。指導者としてもいちばん忍耐力のいる時期である。上達に個人差があり、問題点も一人一人異なるが、早い子で三ヶ月、遅くても入隊後半年くらいで、声を出すための筋肉の準備がととのう。料理にたとえると、ここまですが下準備。合唱隊らしい味が出せるようになるには、このあと一年ないし二年の練習が必要だ。

技術的なことのほかに精神面の問題もある。大ホールで大勢のお客様の前で歌ったり、テレビカメラの前で歌ったりするには、精神面での強さが必要になってくる。ホルスト・シュタインというドイツの有名な指揮者の指揮で、NHK交響楽団にまじって歌わせていただいたときなど、どうにかやりとおせたものの、子供たちにかかるプレッシャーはたいへんなものがあった。そんな大きな演奏会ばかりではないけれど、定期演奏会はあるし、二年に一度は学校の夏休みを利用して海外演奏旅行にもでかける。こうしたとき役に立つのは、なによりも自立

心。団体としてのまとまりも大切だが、それだけでは大きな仕事に対処できない。とにかく自分がやらなければしょうがないんだという自立の精神を一人一人が持つことによって、はじめて団体としての美しさや魅力が生まれてくる。

自立心を養い、あくまでも個性をベースにした協調の方法を学ぶために、折にふれて合宿練習も行なっている。

合宿所は、新宿から中央線で一時間ほどの相模湖畔にある。年通算二十日間ほど、一泊二日ないし二泊三日の予定で行なわれる合宿を楽しみにしている子供は多い。

朝早くから夕食後まで、練習のスケジュールはびっしりだが、ここでの生活自体は、基本的には子供たち自身にまかせられている。寝起きを管理してくれる母親はいないし、ときには上級生や友だちのいじわるにも耐えていかなければならない。きびしい練習によって合唱あるいは音楽そのものを学び、子供たち自身の管理にゆだねられたその他の時間を通して生活の技術を習得する。

はじめてのときは親が子を手離せなかったり、子供が寂しがったりで、練習どころではないといった状況に陥ることもある。しかしそうした試練を乗り越えることで自信もついてくる。中級クラス（小学三・四・五年）になると、早くステージに立ってみたいと考えは始める。

披露されていざ本番の練習に組みこまれると、技術も体力も自分が思ったほどではなかったことに気づき、再び自信がぐらつく。やれる↑↓できない、やりたい↑↓できないの間で心が揺れ動き、体調をくずしてしまうこともある。気持ちが悪くなって本番直前にダウンしてしまう子もいる。

高学年になると体力もつき、ステージにもなれて、実力以上の力を発揮するようになるからおもしろい。

昨年は、日生劇場二十周年公演にモーツァルトの四大オペラが上演されたが、そのうち『魔笛』に出演させていただき、これは子供たちと私自身にとって貴重な体験となった。

悪魔にとらえられ、幽閉された王女を助け出そうとす

る王子を、王女のもとへ導く三人の子供たちという役柄である。

オーディション、自主練習、ピアノ合わせまでの二ヶ月間は、平常心でこなしてきた子供たちも、振り付けがはじまったとたん、とまどいはじめた。声を通してのコミュニケーションしか知らなかった彼らにとって、体を使う表現法は、違う世界のものだった。スタッフの方々のしんぼう強いご指導のおかげで、どうにかできあがってきたものの、本番一週間前になって、再び大きな難関にぶつかかった。

通し稽古で、二期会や外国で活躍中の一流のソロイストたちと顔を合わせ、すっかり萎縮してしまっていたのである。何度もレコードを聴かせてはいたが、目のあたりに見るプロのオペラ歌手の表現力や声量の豊かさは、子供たちの想像をはるかに越えて、とてつもなく偉大で、崇高で、宇宙の星よりもっと手の届かないものに見えたらしい。一人の子供は一時的な拒唱症、とても呼ぶべき症状になり、まったく声が出なくなってしまう。こうなる

と指導者の暖かい励ましという言葉以外に特效薬はない。私としても薄氷を踏む思いだったけれど、心細さの片鱗でも顔に出そうものなら、動揺は子供たち全員に広がってしまう。幸いちょっとした気分転換で回復したが、本番がせまるにつれて、多かれ少なかれ、子供たちは神経過敏になっていく。からだのコンディションを気にし、ほんのちょっとしたフレーズがうまくいかないといっているのは、私に心配を打ち明ける。

私の子供たち（という言い方は傲慢かもしれないけれど）が、おとなと同じように悩み、考え、崖のふちを歩いていくことを、私は誇らしく感じる。そして、やりとげたあとの彼らと彼女たちの表情が、私は大好きだ。

ニューヨークのリンカーン・センターにおける演奏会、ローマのサン・ピエトロ寺院で何万人という聴衆の前で歌った一月一日のミサ、ドイツの旅、韓国での交歓演奏会、それぞれに困難や苦しみはあったが、アルバムに残るのは楽しい思い出ばかり。

子供たちにとって、海外演奏旅行の大きな楽しみの一

つはホームステイだろう。私たちは事情が許すかぎり、訪問国の合唱団の家庭にお世話になるホームステイのシステムをとっている。外国の合唱団が来たときは、私たちの家庭に泊まっていた。

初めて訪れる国の、それも一面識もない家庭に入り込むのだから、いくら子供とはいえ、相応のマナーも必要だろうと、親はやきもきするが、子供たちはけっこううまくやってくる。きびしい練習やステージでの試練を通して、いざというときにうるたえないだけの自信を身につけていると思うのは、我田引水だろうか。

昨年の韓国では、一週間の滞在中、ホームステイは一日しかとれなかったけれど、アメリカ東部フィラデルフィア市でかつて体験した、ほとんどの家庭がプール付きという豪華な一週間にも匹敵するくらい多くの楽しいエキピソードが生まれた。

「大歓待で、夜も朝も焼肉攻めに会った」

「おフロはなんと水プロだった」

「寝るときは二人だったのに、目がさめたら六人もいっ

しよの部屋に寝ていた」

といった土産ばなしが、つぎつぎに私のもとへ届けられる。

子供の全人格的な成長という面から見た場合、私の与えられることは微々たるものにはすぎないというあせりもあるが、それほど大きさに考えなければ、楽しい仕事だし、子供たちと共に歌い、悩み、苦しみ、笑っているうちに、私自身も少しずつ成長して、つぎの年に入隊する子供たちは、前の年の子供たちよりその分だけトクをして——そんなふうでいいのではないかなどと樂觀している。

(東京少年少女合唱隊常任指揮者)

